紅茶の起源

伊藤園中央研究所*

竹尾 忠一

(平成12年3月29日受理)

The Origin of Black Tea

Tadakazu TAKEO

ITO-EN CO., Central Research Institute

Sagara-cho, Haibara-gun, Shizuoka-ken, Japan

1 緒 言

今回中国、イギリスの資料をもとに、Boheaの由来と紅茶の起源についての考察を試みた。

Bohea(ボヒー)という言葉が茶業界に登場したのは、18世紀始めと考えられる。1702年イギリス東インド会社の輸入記録に、上等中国茶300樽とBohea 80樽とあり¹⁾、これがBoheaという銘柄の茶がロンドン茶市場に登場した始まりである。

2 Boheaの由来

1600年代前半、中国茶はジャワ経由で欧州に輸出されていた。この時代の茶は主に寧波辺りから中国籍のジャンクにより、ルソン経由でジャワに輸出されていた緑茶であった。1644年イギリスとオランダとの関係が険悪となり、英国船のジャワ寄港ができなくなったことで、英国の貿易商はアモイに集まり中国交易の基地とした。これが中国特産物が中国から直接英国に送られるようになった始まり

とされている。そのおりアモイでは茶をタまたはティーと発音していたので、この発音をもとにTeaという英語が生まれたという²⁾。

そして17世紀末から18世紀中葉迄英国に送られた中国茶は、大部分は広東、アモイから輸出されたBoheaと呼ばれるものであったと、W. H. Ukersが「Tea and Coffee Trade」に書いている。

またS. H. Twiningは「The House of Twining, 1706—1956」³⁾で、18世紀初頭ロンドンで売られていた中国茶は、Flowery pekoe, Orange pekoe, Souchong, Boheaと分類されていて、Boheaの語源はWu-i(武夷)に由来すると記述している。

他方、広東では発酵茶と考えられる茶が1500年代には飲用されていたことが、ポルトガル神父、ガスパール・ダ・クルツ(1556)が本国へ寄せた手紙に、「ここでは地位の高い人の家を訪問すると、綺麗な盆に乗せた磁器のカップに温かい水のような物を入れて出す習慣がある。その水を茶と呼んでいて、それは赤色をした薬のような物である。」⁴⁾と記載し

* 静岡県榛原郡相良町女神21番地

ているところから類推される。

以上のことから16世紀に始まる欧州への中国緑茶の輸出が、17世紀末になり中国茶の貿易がイギリス東インド会社の独断場となり、貿易の中心が広東に移るとともに、中国西南部で飲用されていた茶 Boheaの、ロンドン市場への輸出が主体となっていった(表1)。また当時ロンドンではコーヒーハウスは衰微して喫茶店が生まれ、庶民の間に喫茶の習慣が高まり、英国の嗜好飲料事情に大きな変化が訪れていた⁶⁾。そして中国から大量の茶を緑茶だけで調達することが量的に困難となつたことと、さらに庶民が飲む茶として安価な茶の需要が爆発的に増大したことから、広東茶商がボヒー (Bohea) と名付けた安価な茶の輸出を煽ったのであろう。1750～1783年の間の中国茶のロンドン価格を見ると、表2のように Boheaの価格は各茶種の中で最低価格であった。

3 Boheaの語源

それではBoheaという言葉の由来について

表1 中国茶輸入統計⁵⁾

	1721—30	1751—60
Black tea	1,000lb	
Bohea	3,360	23,635
Congou	533	532
Suchon	—	421
Pecko	111	105
Green tea		
Singlo	4,577	11,260
Hyson	40	1,380
Other	260	—

表2 茶の価格³⁾

Black tea	Bohea	5- 8 s/lb
	Congou	5-16
	Pekoe souchong	10-18
Green tea	Singlo	10-12
	Hysone	18

注：「The House of Twining」より引用

考えてみたい。この言葉は烏龍茶誕生の地、また中国銘茶伝説の地武夷に由来するとされているが、中国人の発音を聞いてイギリス人がそれにBoheaというスペルを与えたとする、Wu-zhi, Wu-yi, 或いはWoo-eという武夷の清音からその言葉が生まれたとは考えにくい。

最近静岡大農学部何普明助教授から、彼の家郷である浙江省西南部武夷山脈山麓に近い田舎では、武夷のことを昔からブイと発音していると教えられた。このことから福建では古くは武夷をブイと発音していて、武夷産の茶を中国茶商がブイと発音するのをイギリス茶商が聞いて、Bohea(ブヒー)というスペルを与えたものと考えられる。また商売上この茶に箔を付けるために、中国銘茶で有名な武夷の名を、商才にたけた広東茶商が借用したことも考えられる。

19世紀後葉迄、中国は外国人の内陸部旅行を強く禁じていたので、中国内陸部の茶産地の事情については、貿易地の中国茶商からの伝聞による以外は知る手だてはなく、イギリス貿易商がかの有名な武夷岩茶とBoheaとがどのような関係にあるのかは、広東茶商の説明を信じる外にすべが無かったのが当時の事情である。

Boheaの銘柄は20世紀始め中国紅茶のイギリス輸出が衰退するとともにロンドン茶市場から消えてしまい、また現在の中国茶業界ではその間の事情を知る人はいないことから、約百年間余中英貿易界の寵児であったBoheaの語源をこれ以上確かめることは今のところできない。

4 Boheaの産地

清、劉靖撰「片刻余聞集1732」⁷⁾によると、「およそ岩茶は全て武夷の各岩山に建つ寺院、道廟の、僧、道士が摘採して、釜炒り製茶した物(官製茶)である。遠近の茶商は武夷九曲の各寺院にてこの茶を買い付ける。その外に福建省(邵)武、また江西省広信府等の各所(武夷山脈山麓地帯)で生産される茶に黒色紅湯(外観黒く、水色が紅色)の茶があ

る。これは武夷九曲上流の星村の茶問屋で取引されている。その値は安く茶は粗大である。近里ではこれを江西烏といい、山地部族が星村に持ち込み売っている。」とあり、18世紀中葉武夷山には釜入茶とは別に、武夷山脈奥地で山地部族（畚族：畚は中国語で焼畚の意）により造られていた黒色紅湯の茶が、武夷の星村で盛んに取引されていたことが記述されている。

またR. Fortuneがその中国内陸部探検記「Tea District of China & India, 1853」⁸⁾にも、彼が外国人として始めて武夷山に密入域し、この地域の茶業を調査し、茶樹を収集した際の記録に、「武夷山では多数の寺院、道廟で、僧、道士、作男らの手により茶が造られている。この地域の寺院の庭には竹製の棚が並び、その棚には茶葉を薄く広げた竹ざるが差し込まれている。土間では火炉が並び僧や作男が忙しく働いていた。ここで造られた茶は寺院内での飲用の外に、寺、廟の庭先で遠近の茶商と取引されて、崇安から武夷山脈越えて江西省の河口を経て中国各地へと移出されている。また星村では大量のBlack Tea（紅茶）が周囲の山地から集荷され、上海、広東に移出されて輸出用となっている。」と記述している。

このように18世紀の武夷山地区には釜炒茶と、これとは別に武夷山の後背山地（武夷山脈山麓の福建西南山地、江西南部山地、広東東部山地等）で、江西烏と云はれる発酵茶（日干紅茶？）が山地部族の手により造られていて、武夷の奥、星村を中心に大量取引されていて、これがBoheaとしてロンドンに輸出されていたものと考えられる。

尚、ここで説明すると中国観光の名所武夷山は、福建省の西部に南北にわたり連なる武夷山脈から別れた低い山々により構成されている丘陵地帯で、昔から古文、詩等で有名な武夷とはこの地域を指している。ここには100年程前迄は丘々には寺院、道廟が建ち、多くの僧侶、道士が生活していたが、その後この地は荒廃して寺院、道廟は総て滅び、現在は観光用の亭が丘の上に建つだけで昔日の面影

はない。また有名な武夷岩茶を産した茶園も、今では武夷山を歩いても見ることは出来ない。また武夷山脈一帯は清に服従しない山地部族の居住地で、ここで生産される農林産物は武夷山地区に運ばれて漢人との間で取引されていたとのことである。

5 Boheaの末路

阿片戦争（1842）を境として19世紀末には、紅茶産業の中心がインド、アッサム地方に移り、ロンドンでのBoheaの市場はインド紅茶に奪われて、イギリス紅茶界からBoheaという銘柄が消えた。しかしMoneyの「The Cultivation & Manufacture of Tea 4版, 1883」⁹⁾には、紅茶の下級銘柄としてBohea（武夷）が記載されていることから、インドではBoheaが紅茶の一銘柄として19世紀末迄残っていたようである。

他方、1916年に外務省通商局が出版した「福建事情」¹⁰⁾には、「福建で生産され流通している茶の主体は紅茶で、紅茶は工夫、小種、烏龍、包種、団茶その他に分類されていて、烏龍は紅茶全体の2分の1程度の生産量を占めている。烏龍は夏の茶葉から主として造られるために、その品質は工夫、小種より劣る下級紅茶である。」と記載されている。こうように20世紀初期の中国茶業界では、Boheaという銘柄は無く、烏龍茶が紅茶の一銘柄として分類されている。

以上のような事情からBoheaと烏龍茶とは同根の茶種で、19世紀末にはイギリスと中国とで別々の呼称で呼ばれていたのではなかろうか。

6 武 夷 茶

さて本来の武夷茶にもどり中国文献を調べると、徐表然の「武夷山志1619」を引用した周亮工撰、「閩小記, 1655」¹¹⁾には、「武夷、紫帽、龍山では各地で茶を生産している。この地の寺僧たちは茶葉を上手に干焙出来ない。そこで茶葉を摘採後先ず蒸した後釜で焙乾する。そのため茶の色澤は紫赤となる。」とあり、武夷茶は17世紀にはまず茶芽を蒸してから釜

で焙乾した緑茶であった。

また陸廷燦の「続茶経1734」¹²⁾に引用されている「隨見録」には、「建州の茶樹は全て喬木である。…。それに対して武夷の茶樹は灌木であり、昔は喬木は見あたらなかった。…茶は本来光にあたると香味を損なうが、武夷茶は最初に日光に晒してから造ると良い茶が出来る」とある。また陸廷燦の「続茶書 1734」に引用されている「王草堂茶説」¹³⁾にも、「武夷茶。茶葉を摘採後、竹箆に均一に広げ、棚にさして風と日光にさらす。これを日晒しという。やや葉色の青みが薄くなった時、これを釜で炒る。」とある。

このように武夷茶は始めは普通の釜炒茶であったが、その後茶葉を先ず日晒してから造る製法に変わっている。この日晒製法については、16世紀中葉、明の高濂が日晒し茶(現在の龍井茶製法に繋がる)の香味が優れていることを「遵生八牋(1580)」¹⁴⁾に記述していて、その後、これが中国各地銘茶の製造に应用されていて、武夷にもその技術が伝わったものと考えられる。

7 中国紅茶

武夷に江西烏という茶が有ったことは前述の通りであるが、それとは別に武夷の工夫茶、小種茶の由来についての記述を調べると、前出の陸廷燦の「続茶経」に「武夷茶は山で造られた物を巖茶といい、河辺で造られた物を州茶という。…。そのうち品質の最も佳き茶を工夫茶といい、工夫茶に勝る物に小種茶がある。これ等は茶樹の名をとり茶の名としている。」とある。つまり18世紀始めの工夫茶、小種茶は武夷茶の特定銘柄で品種名に由来する緑茶であったと考えられる。

それでは発酵茶についての漢人の記述はというと、それはかなり年月が経った約100年後となる。

宋景藩撰(1874)「種茶説十条」¹⁵⁾と、葉瑞延撰(1888)「薊浦隨筆」¹⁶⁾に紅茶製法が書かれているが、それ等を要約すると、「茶生葉を日光に晒して萎凋した葉を積み上げ、足で揉み茶汁を絞り出したあと、再度日光に晒し、再び

手で良く揉み、その後茶葉を布袋に入れて圧縮密閉し、茶葉からの発熱を利用して数時間加温して、茶葉が銅褐色に変じ茶がしつとりと汗ばんだら、再び日光の下に広げて干し、その後釜で乾燥して茶とする。」と書かれている。

このように、中国紅茶の製法が漢人の文献に現れてくるのは19世紀後期であるが、いずれも著者、年代不詳の原著から引用したものであり、実際には19世紀始めには既に山地部族のBohea製造法を漢人は取り入れて、紅茶を造っていたものと考えられる。

これを裏付けるものとして、「担洋、白琳、政和の紅茶は、1850—60年代胡志梅が烏茶(Bohea)の製法をまねて造り、始めは星村で売買していたが後には直接外地に輸出した。」という記録があり、湖南の安化県、巴陵県、湖北の讓陽県、安徽の祁門県等の紅茶も、1850年前後に福建から製茶技術を導入して生れたものである。

また中国紅茶製造法がFortune¹⁷⁾によりイギリスに紹介されたのが1853年であり、その後アッサムでこの方法に準拠した紅茶製造法が普及したのは、Moneyの著書¹⁸⁾から見て1870年以前であることから、中国での漢人による紅茶製造が19世紀初頭には始まっていたのではなからうか。

8 烏龍茶

もう一つの発酵茶、烏龍茶の起源を訪ねると次のような仮説が生まれる。元来18世紀代には中国には烏龍茶なる銘柄は無く、緑茶と紅茶の2種に分類されていた。この内、緑茶は漢人が造り漢人が飲用する茶であり、他方紅茶は山地部族が造り彼等が飲用する茶であった。それがイギリス貿易が始まるとともにロンドンで名声をなくし、中国茶貿易業界の主商品として登場した。漢人は最初の内はBoheaをつまるところは赤毛外蕃の飲料としてしか見ていなかったが、Boheaの世界的需要が高まるとともに、閩北地方で漢人によるBoheaの生産が始まり、19世紀にはこれが中国紅茶の一銘柄となつた。さらに茶の輸出力

が延びるとともに、Boheaの生産は武夷よりも海岸に近く流通に便な、閩南の安溪茶産地へと主産地が移動し、また製造法の改良も進み現在の烏龍茶に発展したと考えられる。

安溪の茶についての記述を調べると、その初出は「安溪県志1552」¹⁹⁾で「常棣、崇善等里に茶産す」とあり、かなり古くから緑茶の生産が行はれている。19世紀に入りBoheaの貿易増大とともに安溪の茶産地はBoheaの生産に力をいれ、20世紀始めには閩北茶産地の衰退とともにそれに代わる茶産地となった。

9 結 言

中国の福建、武夷山脈の山麓には、山地部族により造られていた江西烏（発酵茶）が16世紀頃からあった。17世紀末この茶はイギリス人によりロンドンに紹介され、間もなく中国僻地の一地方茶からBoheaとして世界の茶に成長した。やがて中国でもこの山地部族の茶をもとにして、19世紀中葉、中国紅茶が誕生し烏龍茶が生まれた。そして19世紀末には、このBoheaから現在の英国式紅茶がインド・アッサムで創られその産業化が成功した。これが中国、インドでの発酵茶史の経緯といえよう。

10 引 用 文 献

- 1) 春山幸行夫；紅茶の文化史 p55 (1991), 平凡社.
- 2) 同上；p54
- 3) S.H. Twing; The House of Twining 1706-1956 (1956), Published by R. Twining & CO.LTD. (London)
- 4) B.S. Dodge (白幡節子訳)；世界を変えた植物 p135, (1988), 八坂書房.
- 5) 角山栄；茶の世界史 p51 (1980), 中央公論社.
- 6) 同上, p32-46 (1980).
- 7) 陳祖槩, 朱自振編；中国茶葉歴史資料輯, p367 (1981), 農業出版社 (北京).
- 8) R. Fortune; Tea District of China & India, p232, 238, 246 (1853), Published by John Murray, (London)
- 9) Lieut-Col. E. Money; The Cultivation & Manufacture of Tea, 4th Edition, p137 (1883), Published by W.B. Whittingham & Co. (London)
- 10) 外務省通商局編纂；福建事情, p193~p197 (1917), 敬成社.
- 11) 陳祖槩, 朱自振編；中国茶葉歴史資料輯 p341
- 12) 同上；p362
- 13) 同上；p363
- 14) 同上；p301
- 15) 同上；p417
- 16) 同上；p428
- 17) R. Fortune: Tea District of China & India, p278-279
- 18) Lieut-Coli, E. Money: The Cultivation & Manufacture of Tea, p123-130
- 19) 吳覺農編；中国地方志茶葉歴史資料輯, p348 (1990), 農業出版社 (北京)